



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	働く人の学びの機会と動機付け
Author(s)	細川, 美香
Citation	社会教育研究, 37, 41-50
Issue Date	2019-11-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76477
Type	departmental bulletin paper
File Information	005-0913-0373-37.pdf



働く人の学びの機会と動機付け

細 川 美 香*

目 次

はじめに	41
1. 筆者の略歴	42
1-1 大学～大学院修士課程	42
1-2 経済団体での勤務	42
1-3 編集プロダクションでの勤務	43
1-4 独立開業	43
2. これまでに経験した社会人としての学び	43
2-1 コミュニケーションを学ぶ体験学習会（参加～担い手）	43
2-2 職業的な技術向上のためのセミナー（参加）	43
2-3 学びを軸とする異業種交流的な勉強会（参加）	43
2-4 民間企業による能力開発系のセミナー（参加）	44
2-5 クリエイターのための勉強会（担い手）	44
3. 学ぶ人のインタビューより	45
4. 学びの機会と動機付けについての考察	48
4-1 学びの動機付け	48
4-2 動機から生じる機会の創出	48
4-3 結果とその後の意識変化	48
5. まとめと考察	49
参考文献	50

はじめに

生涯学習時代と言われるようになって久しく、社会にはあらゆる学びの場や機会が存在している。筆者自身は、大学院修士課程で社会教育を学び、その後社会に出て経済団体・民間企業で働き、独立

* 北海学園大学・非常勤講師

開業する過程の中で、さまざまな学びの機会に出会い、参加または担い手として活動してきた。

その中で社会教育から受けた影響は強く、中でも、人間関係の中から生じる学び合いの価値や、学ぶことで主体形成を図り、人生を自らの手で作り上げていくことの大切さを、仕事や社会人になってからの学びで大きく感じる事となった。

ユネスコの生涯学習の定義によれば、すべての人が学習する権利を持ち、生まれてから死ぬまで、生涯にわたり学ぶことで自分の人生をつくり、豊かな一生を歩むことができるといわれている。

現在は、大人のための学びの場については、日本でも、社会教育行政による場や、民間企業によるセミナーや講座等の学習機会、そして一般市民相互の学び合いによる機会などがある。

ここでは、いわゆる社会運動に参加するような人だけではなく、働く現役世代である一般の会社員や自営業者が学ぶ場について取り上げたい。学習の場としてはどのようなものがあるか、また、どのような動機付けでそれに参加しまたは学ぶ場を作り上げていくのか、どのようにその学びの場に出会う機会があるのか、学ぶ中ではどのような課題があるのかを考察する。特に、これまで研究されてきた学習の場の事例では、学ぶことで自らの生活の中での問題解決を図り、人との交流による相互作用から学びを深め、享受する意識から担い手としての意識、そしてまちづくりなど公共的へと変化してきた過程が報告されているが、働く人の学びの場でもそのようなプロセスを踏む可能性があるのか、自分自身の経験と、自ら学ぶ人3人へのインタビューを踏まえ、考察を試みる。

1. 筆者の略歴

1-1 大学～大学院修士課程

北海道大学社会教育研究室にて、社会教育の基礎を学び、また、卒業論文では「地域における芸術文化の発展とネットワーク形成」をテーマに、地域の中学校・高校が音楽を通して連携し、教師・生徒から住民へ向け、芸術文化の発展に寄与する過程を調査した。

大学院修士課程に進み、修士論文として「地域における舞台芸術創造活動の展開過程」をテーマに、地域に根ざして芸術創造活動を行う人のさまざまな形を取り上げ、その活動をどのように展開してきたのか、地域にどのような影響を与えたのかを調査した。

研究を通して、問題を解決し人生を自らの手で作るには、学びと仲間づくりは不可欠でありすべての人に必要であることを学んだ。さらに、大学内はもとより、社会教育を学ぶ中で知り合った他の大学の学生や、社会教育の現場で働く大人など、多数の人との交流の機会があり、影響を受けた。

1-2 経済団体での勤務

札幌市内の経済団体に4年間勤務。会員企業向けに経営に関する情報などを発信する広報誌編集を担当。業務内での研修等には参加するものの、自主的な学びの場には参加する機会を持たなかった。

1-3 編集プロダクションでの勤務

広告物の編集を専門に行うプロダクションに転職、5年間勤務。経済団体時代と比べ勤務時間が長く、休日も少なくなったが、知人からの声掛けにより、コミュニケーションを学ぶ体験学習会（後述 2-1）に参加。後に、事務局メンバーとして運営にも携わる。

1-4 独立開業

勤務していた会社の事業縮小による解雇を機に、独立開業。編集とライターの業務を軸に、広告制作の仕事を行う。経営に関するさまざまな課題に直面するごとに、必要な学びを求めて、セミナーや勉強会など（後述 2-2～4）に参加。仲間（後述の B さん）の声掛けにより、クリエイターのための勉強会（後述 2-5）を立ち上げる。

2. これまでに経験した社会人としての学び

2-1 コミュニケーションを学ぶ体験学習会（参加～担い手）

アメリカで開発された「ラボラトリーメソッドによる体験学習」という技法を使い、人間関係やコミュニケーションのトレーニングをする勉強会。参加者は、教員、福祉関係など対人援助職を中心に、会社員や公務員などが集まる。

主な内容は、体験学習のファシリテーションを交代で実習し、参加者からフィードバックすることで、ファシリテーションの技術が身についた。

筆者は、立ち上げ当初から参加者として加わり、途中から事務局メンバーとして運営に携わる。独立開業後は、自分の求めるもの（経営的な課題）と会の目的が違ってきたため、徐々に足が遠のく。

2-2 職業的な技術向上のためのセミナー（参加）

業務の技術を向上させ成果（売上）を上げることを目的に、コピーライティング、マーケティング等のスキルを身につけるために、民間企業や個人事業主、カルチャーセンターが主催するセミナーや講座に参加。

2-3 学びを軸とする異業種交流的な勉強会（参加）

自営業者が主催し、招待制で参加者が知人を誘い、広がっている異業種交流的な勉強会。経営者や自営業者が多いが、会社員や公務員なども幅広く参加。

毎回、全員が 30 秒で自己紹介する機会があり、短い時間ながら人前で話す練習になる。また、希望者がプレゼンをするため、参加者から知識や刺激が得られ、プレゼンをする人は技術の向上になる。

人脈が広がり、それがきっかけで仕事にも結びついている。

2-4 民間企業による能力開発系のセミナー（参加）

東京に本社がある民間企業が主催する能力開発系のセミナーを、知人からの勧めで受講。もとは、このセミナーを受講する人が札幌で開催している勉強会に参加し、その勉強会で参加者との交流が広がり、知り合った参加者からの勧めでセミナー受講に至った。

内容は、選択理論心理学をベースに、人間関係の向上と目標達成の技術を伝えるというもので、継続学習を勧める仕組みが出来ている。

筆者も最初の受講から、再受講や段階を追った受講の制度に則って継続学習を行っている。学んだことを実践することで、身近な人間関係が良くなり、仕事の成果も上がるようになった。

また、全国に仲間が増え、親しい友人もできた。

2-5 クリエイターのための勉強会（担い手）

2-3の勉強会で知り合ったデザイナー、カメラマンからクリエイターのための勉強会を立ち上げたいという相談を受け、運営メンバーとして参加。その後建築士も運営メンバーに加わり、ものづくりに携わる人が仕事の内容等をプレゼンしお互いに刺激を与え合うこと、メンバー間の交流を深めることにより一緒に仕事をする機会を作ることを目的に会を立ち上げる。

広告制作、建築と異なる分野の仕事から刺激を受けるとともに、会の運営自体のスキル向上も動機付けとなっている。

【表1】筆者の学びの機会と動機付け、結果

学びの場	学ぶきっかけ・動機	学んだ結果	動機付けの変化
コミュニケーションを学ぶ体験学習会 (参加→運営)	知人(学生時代から)の誘い 人間関係を良くしたい	体験学習のファシリテーションの技術が身についた	会の目的に沿って、活動内容を改善したい 会を良くしたい
職業的な技術向上のためのセミナー (参加)	知人(仕事関係)の誘い、インターネット等の情報 仕事で成果を上げたい	コピーライティング、マーケティングの技術が身につき、仕事に生かしている	クライアントに役立てるため、精度を高めたい
学びを軸とする異業種交流的な勉強会 (参加)	知人(他の勉強会を通じて)の誘い 人との交流が欲しい	さまざまな人との交流 知らない情報を得られて刺激になる 人脈が広がり、仕事に結びつく	仕事の合間を見つけて、続けて参加したい 知り合った参加者や新しい人との交流を楽しみたい

民間企業による能力開発系のセミナー (参加)	知人（交流会を通じて）からの紹介で勉強会に参加、他の参加者からの勧めでセミナーを受講 人間関係、仕事の成果を上げる方法を学びたい	人間関係、仕事の成果を上げるための方法を学び、継続学習とともに実践すると、徐々に意識が変わり成果が出るようになった 全国に仲間・友人ができた	継続学習を行いたい さらに成果を高めたい
クリエイターのための勉強会 (運営)	上記、異業種交流的な勉強会で知り合った B さんから、勉強会立ち上げの相談を受ける 役立つなら力になりたいと考え、運営メンバーに加わる	勉強会を立ち上げる目的や、会の進め方に関して意見を交わし、人それぞれの考え方の違いに触れて感銘を受ける 会の中で、ものづくりに携わるメンバーの仕事内容や考え方から刺激を受ける	運営メンバーや参加者の意見を吸い上げ、ニーズを反映した楽しい会を作りたい 会の運営をスムーズにし、参加者が満足できる会にしたい 会の運営や場の雰囲気を作る スキルを高めたい

3. 学ぶ人のインタビューより

さらに、他の人はどのような機会や動機付けで学んでいるかを考察するため、筆者と同じ学びの場に参加する人を対象にインタビューを行った。

【表 2】A さん（司法書士・30 歳代）

学びの場	学ぶきっかけ・動機	学んだ結果	動機付けの変化
専門分野の研修 (参加)	年 12 単位は義務。資格取得当初は、新人はどれも必要だと思い、なるべくたくさん受けていた 司法書士として、法律を通して幸せな社会を作りたいという思いは持っていた	専門知識が得られるのはもちろん、特に全国での研修は、法律家として、人間としてのあり方を学べる	今もしくは今後、業務に役立つものを選んで受講するようにしている 学ぶことを通して日本の社会の問題を解決したいと思うと共に、事業者として成果を出していきたい

学びを軸とする異業種 交流的な勉強会 (参加)	開業した当初、取引業者 の紹介 仕事にもつながる人との 出会いが欲しかった が、ただ飲んで騒ぐだけ の異業種交流会は嫌だ った 勉強会だと聞いたので 参加した	法律とは違う学び、参加者も 前向きな人が多いので刺激に なった 仕事ではなくコミュニケーションが学べた 知らないことを知れる 人脈も広がり、仕事にもつな がった 30 秒の自己紹介やプレゼンが 良かった	自分の知覚になかったもの にはマイナスの感情を覚える こともあるが、そういう ものこそ自分を成長させて くれる 仕事の都合などもあるが、 会の主催者にお世話になっ たので、恩返しも含めて参 加したい
民間企業による能力開 発系のセミナー (参加)	顧問税理士の紹介 以前に、この会社が出版 した本も読んでいた 仕事の業績を上げたい	選択理論心理学を学び、人が 問題行動を起こす理由、起こ さないためにどうすればよい かを学べた 人はいつからでも、どこから でも変われる、情報を得るこ とが必要、誰に言われるかでも 変わる	家族など人間関係を良くし たい 良い社会を作りたい 挑戦し続ける人でありたい 子供に自分が挑戦する姿を 見せ、何事にも前向きに挑 戦する大人になってほしい
相続の勉強会 (主催)	業務で力を入れている 相続、円満な家族関係を 広めて世の中を笑顔に したい 相続の業務での成果 自分の分身を作りたい		もともと、学生時代からリ ーダーシップをとるタイプ だったので、学ぶ中で主催 者側に回るという意識変化 はあまり感じない

【表 2】B さん（カメラマン・40 歳代）

学びの場	学ぶきっかけ・動機	学んだ結果	動機付けの変化
学びを軸とする異業種 交流的な勉強会 (参加)	人と関わるのが苦手な ので、交流会や勉強会は 避けていた 人との関わりが少ない と、自己完結型になり生	最初の 3 回くらいは違和感が あった 弁護士の人などもいて緊張し たが、一緒に酒を飲むと人間 くささを感じ親しみが湧いた	自分の話に耳を傾けてくれ る 自分もやりたいことを勉強 会としてやってみようと思 った

	活や仕事も縮小してしまう 克服するために、知人に聞いて参加	みんなの話に耳を傾けてみようと思った 職業によっては現場を知らない人もいるが、それより言っていることが正しいかが大事	
クリエイターのための勉強会 (主催)	世代の違う人と価値観を共有したい 特にものづくりをする人と価値観を共有したい 仲間 3 人に話したら共感してくれ、一緒に主催することになった	自分は緊張感のあるディスカッションを求めているが、やってみると和気あいあい仲良くやる雰囲気 その良さはあるのでそれを生かした会にしようと思った	年長者の自分が発言すると右へ倣えになるので、少し距離を置きたい 若い人の感覚を仕事に取り入れたい 自分が経験してきたことを若い人に伝え、小うるさいオヤジ的なポジションでいたい

【表 3】C さん（不動産会社勤務・30 歳代）

学びの場	学ぶきっかけ・動機	学んだ結果	動機付けの変化
学びを軸とする異業種交流的な勉強会 (参加)	知人の紹介で、異業種のひとと知り合えると聞いたので 知らない人に会うこと、人前で話すことが嫌だった 営業職に就いたので、克服して成果を出したい 自分の視野を広げたい	自己紹介などもあり、最初は行きたくないと思ったが、嫌でも行っていた 行けば楽しかった 苦手なタイプの人ともコミュニケーションが取れるようになってきた 色々な業種のことがわかった	今でも億劫だと思えることもあるが、苦手なことを克服、挑戦するために行った方がいいと思っている
民間企業による能力開発系のセミナー (参加)	社長の勧めで 自分の嫌な部分に直面するのが嫌だったが、自分を変えたいから行こうと思った	他の人は嫌なことを乗り越えていてすごいと思った 座学は勉強になるが実践はできていない	行きたいとも思うが躊躇する気持ちが強い

職業的な技術向上のため勉強会 (参加)	仕事のために資格を取ろうと思った 一人だと勉強できないので参加しようと思った	仕事となればやらざるを得ない 勉強が嫌いだったので、遅れを取り戻すために必死でやった	
------------------------	---	---	--

4. 学びの機会と動機付けについての考察

4-1 学びの動機付け

全員に共通しているのが、「人との交流、コミュニケーションを求める」という部分だった。特に、仕事では得られない、異業種の人との交流を求める傾向が強かった。

但し、「人との交流」をさらに深掘りすると、「人との交流を楽しむ」という側面もあるが、筆者及びAさんのように、「仕事での成果（受注）を求めて人脈を求める」というタイプ、BさんCさんのように「コミュニケーションが苦手なので、それを克服したい」と、コミュニケーション自体を学びの内容と捉えているタイプに分かれた。

また、「仕事で成果を挙げたい」という動機も共通している。それも、全員に共通したのは（直接的に、職業教育的な観点で）「技術向上を図って成果を挙げたい」という側面であったが、筆者及びAさんのように「人脈を通して成果（受注）を挙げたい」という側面もあった。

4-2 動機から生じる機会の創出

全員・ほぼ全ての学びの機会に共通しているのが、「知人からの誘い」や「業務上で必要（なので情報が入ってくる）」という機会だった。その知人とは、筆者の場合は学生時代からの友人もいたが、全員に共通しているのは仕事上の知人であった。また、学びの場に参加することでできた知人が、他の勉強会に誘うというケースも発生している。

知人からの紹介以外で、インターネットで見つけた情報を元に学びの場に参加したのは筆者のみであった。

ただ、民間企業主催のセミナーなどは参加費が高額な場合もあり、参加動機や知人の紹介があるからといって、必ずしも参加に結びつけられるとは限らない場合もある。

4-3 結果とその後の意識変化

求めていた「人との交流、コミュニケーション」については、筆者及びAさんの「仕事につながる人脈が欲しい」という面については、両者とも達成できている。

また、Bさん及びCさんの「コミュニケーションが苦手なので克服したい」という面についても、

Bさんは、今まで触れ合ったことのなかった職種の人との交流を通して、人の話を聞いてみようと思い、自分の話も聞いてもらえると実感した経験から、次のステップとして勉強会の立ち上げ・主催に至っている。Cさんは、参加者との交流を通して、仕事の場面でも苦手な人とも話すことができるようになったと、一定の成果を実感している。

同じく全員に共通していた「仕事で成果を挙げたい」という動機に関しては、直接業務に関連する知識を教える内容、例えば筆者のようなセミナーの受講や、Aさん、Cさんのような専門分野の研修については、業務を行う上で不可欠であったり、直接仕事の成果にも結びつきやすい。

一方、筆者とBさんが運営に携わっている同業者の勉強会については、すぐに成果に結びつくというよりも、お互いの考え方や知見に触れ、今後の自分の知識・技術習得や考え方に刺激と影響を受けたという側面が大きい。

また、「楽しむ」というキーワードが見られたのは、筆者とCさんであり、学びの動機付けの中に楽しさがあるかどうか分かれるところであった。

Aさん、Cさんについては、苦手なことも（マイナスの感情が芽生えたとしても）克服するために取り組む、という姿勢を持っていた。

学びによる意識変化について、Aさんは「専門的知識を生かして社会に広めていける人材を育てたい」という動機で自ら勉強会を主催している。但し、会を主催すること自体は、学生時代からリーダーシップを取ることが多く抵抗感はなかったとしている。Bさんは、「自分の経験を若い人に伝えたい」という思いを持っており、最初の勉強会に参加して「自分の話に耳を傾けてもらえる」と感じた成功体験が、自ら勉強会を立ち上げる決め手となっている。筆者は、学びの場に参加する中で、運営上での課題に出会ったり、他の運営者から求められるなどの形で、会の担い手としての立場も経験している。

いずれも、自らが享受する側にいた学びから、人に伝えることを行動に移している事例といえるが、そのプロセスは個人によって異なっている。

教える-教えられる側が区別されている専門分野や民間企業主催のセミナーでは、その仕組みの中では享受側から担い手へ移ることは無いが、その学びの中で公共的意識が芽生え、別の場で行動に移せる可能性は十分にあり得る。

5. まとめと考察

今回は、筆者を含め4人とサンプル数は少ないが、その中でも一定の傾向を見ることができた。

動機付けに関して、「仕事での成果」「仕事のための苦手の克服」など、仕事に関連した動機付けになっていることは、現役で働く世代にとって、仕事が生活の中の大きな関心事であることに由来していると思われる。また、Cさん以外が全員自営業者であることも起因していると考えられる。さらに

その中には「楽しみたい」という動機や、「(マイナスの感情を抱いても) 苦手を克服する」という動機が存在する。

そして、全員が人との交流、特に異業種の人を求めて学びの場に参加しているという面も大きな特徴といえる。その中身は、「人との交流を楽しみ、仲間を作る」「幅広い知見から刺激を受ける」「コミュニケーションが苦手なのを克服したい」とさまざま、人との触れ合いが学びの場の大きな価値であることは間違いない。

そして、学ぶ機会については、知人の紹介が大半を占めていた。学びの場に出向くことで、その後の学びの機会が広がる可能性にもつながっている。一方、学びの機会が従来持っている人間関係に既定されてしまう面も伺える。知人の紹介によらず、学びたいことを学べる場を探したり、自ら何もないところから仲間を募るなど、学びの機会を創る行動に出るか否かがどのような要因によるのかは、今後の課題としたい。

学びによる意識変化については、現役で働く人の学びについても、享受側から担い手、公共的意識への一定の変化は見られる。その変化をもたらす要因の深掘りについても、同じく今後の課題としたい。

また、さらに多様な学びの場や、異なる立場や職業の人へのインタビューを行い、働く人の学びの動機付けやプロセスについての考察を深めたい。

参考文献

- 小林繁・平川景子・片岡了著『生涯学習概論 学びあうコミュニティにむけて 改訂版』エイデル研究所、2018年
大前哲彦・千葉悦子・鈴木敏正編著『講座 主体形成の社会教育学 地域住民とともに』北樹出版、1998年
鈴木敏正・朝岡幸彦編著『社会教育・生涯学習論 すべての人が「学ぶ」ために必要なこと』学文社、2018年